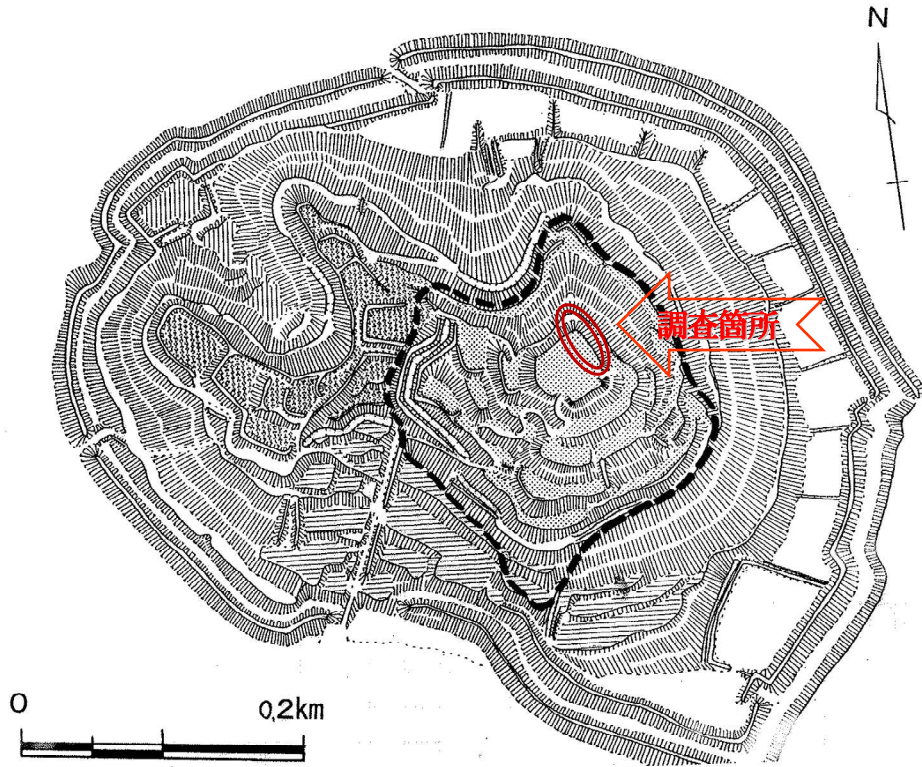


史跡小牧山発掘調査主郭地区第7次発掘調査 調査の概要報告

小牧山城縄張図
(破線の範囲が主郭地区)



春日井郡小牧村古城絵図(部分拡大)
※十七世紀中頃 蓬左文庫蔵



調査面積

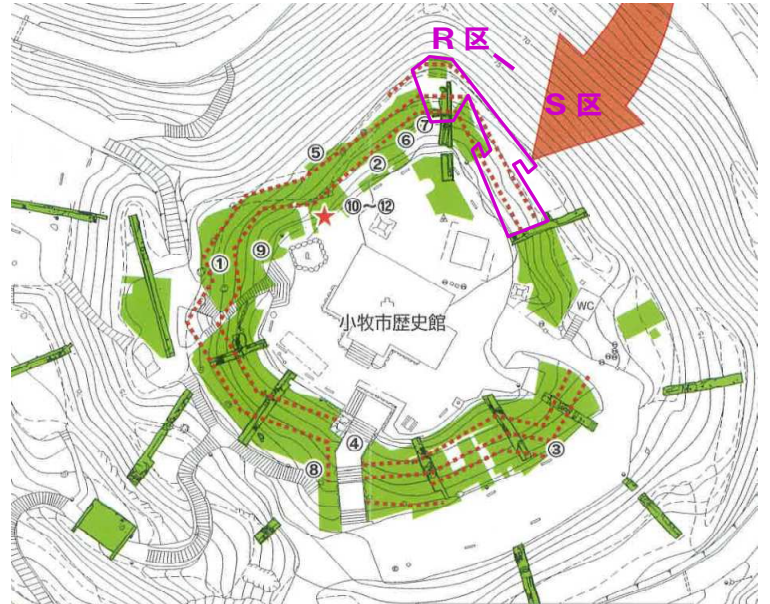
約260㎡

調査期間

平成26年11月～平成27年3月

1 調査の概要

【注】本市では従来の調査の成果から、石垣の呼称を「上段石垣」、「下段石垣」と表現してまいりましたが、このたびの確認をうけて「石垣Ⅰ」（＝上段石垣）、「石垣Ⅱ」（＝下段石垣）、「石垣Ⅲ」（＝3段目の石垣）と改めさせていただきます。

**1. R区 (写真1・2)**

主郭(本丸)北～北東斜面の調査区である。山側から石垣Ⅰ、Ⅱ、曲輪051、石垣Ⅲを確認した。

石垣Ⅰは北西～北～北東と3方向に屈曲を繰り返している。北西～北の屈曲部(出隅)には隅角石の基底石が残存していた。石垣Ⅱは石垣Ⅰに並行するような平面プランで築かれている。

昨年度実施した北西斜面の調査では、石垣Ⅱ前面の平坦部(曲輪051)に幅1mほどの範囲に拳大の扁平な川原石が敷き詰められていたが、今回の調査では確認できなかった。



写真1 R区 石垣Ⅰ・Ⅱ



写真2 R区 石垣Ⅰ 出隅部

2. S区 (写真3、4)

主郭(本丸)北東斜面の調査区である。山側から石垣Ⅰ(一部)、Ⅱ、曲輪051を確認した。調査区の南端では現代の大規模な攪乱が見つかり、それによりこの調査区から南では石垣Ⅰ(一部)、Ⅱの大半が失われている。

石垣Ⅰは調査区北端を除きほとんどで築石が失われている。築石の背後の裏込石層と主郭の造成土層は残存しているため、石垣のおよそのプランと高さが推定できる。調査区南端のトレンチでは、裏込石と主郭の造



写真3 S区 石垣Ⅰの背面構造

成土を区画するために意図的に投入された「土留石（押さえ石）」といわれる大ぶりの石材が垂直方向に埋設されている状況が良好に観察できた(写真3)。

石垣Ⅱはこれまでの調査で確認した成果では一度に確認できた最長を検出しており、自然石を一直線に緻密に並べ、築いている状況が明らかとなった。調査区中央やや南寄りでは、石垣Ⅱ前面に掘られた直径約1mの土坑(SX01)により石垣Ⅱとその背後の裏込石と造成土が崩落している状況も看取された。

調査前に主郭北の斜面のみに築かれたと想定していた石垣Ⅲは、石垣Ⅱからやや東に広がるラインで北東斜面に延びることが確認された。

3. 石垣Ⅲについて(写真5、6)

上記2調査区で確認した石垣Ⅲについては下記のような特徴がある。

構築状況の観察から、石垣Ⅲは石垣Ⅰ、Ⅱと異なり、「腰巻石垣」(写真6)である可能性が高いと思われる。

また石垣を構成している石材は石垣Ⅱと同等またはそれよりも小ぶりで30～50cm大のものが主体である(写真5)。多くを小牧山産出の自然石(堆積岩)が占めるが、搬入石材である花崗岩の石材も含まれ、その分布が石垣Ⅰ、Ⅱと比較して格段に多いことが特異である。また、これまで一切確認されていなかった丸石の築石2個体も確認している。



写真4 S区 石垣Ⅱ 崩落部分



写真5 R区 石垣Ⅲ 検出状況



写真6 石垣Ⅲ セクション

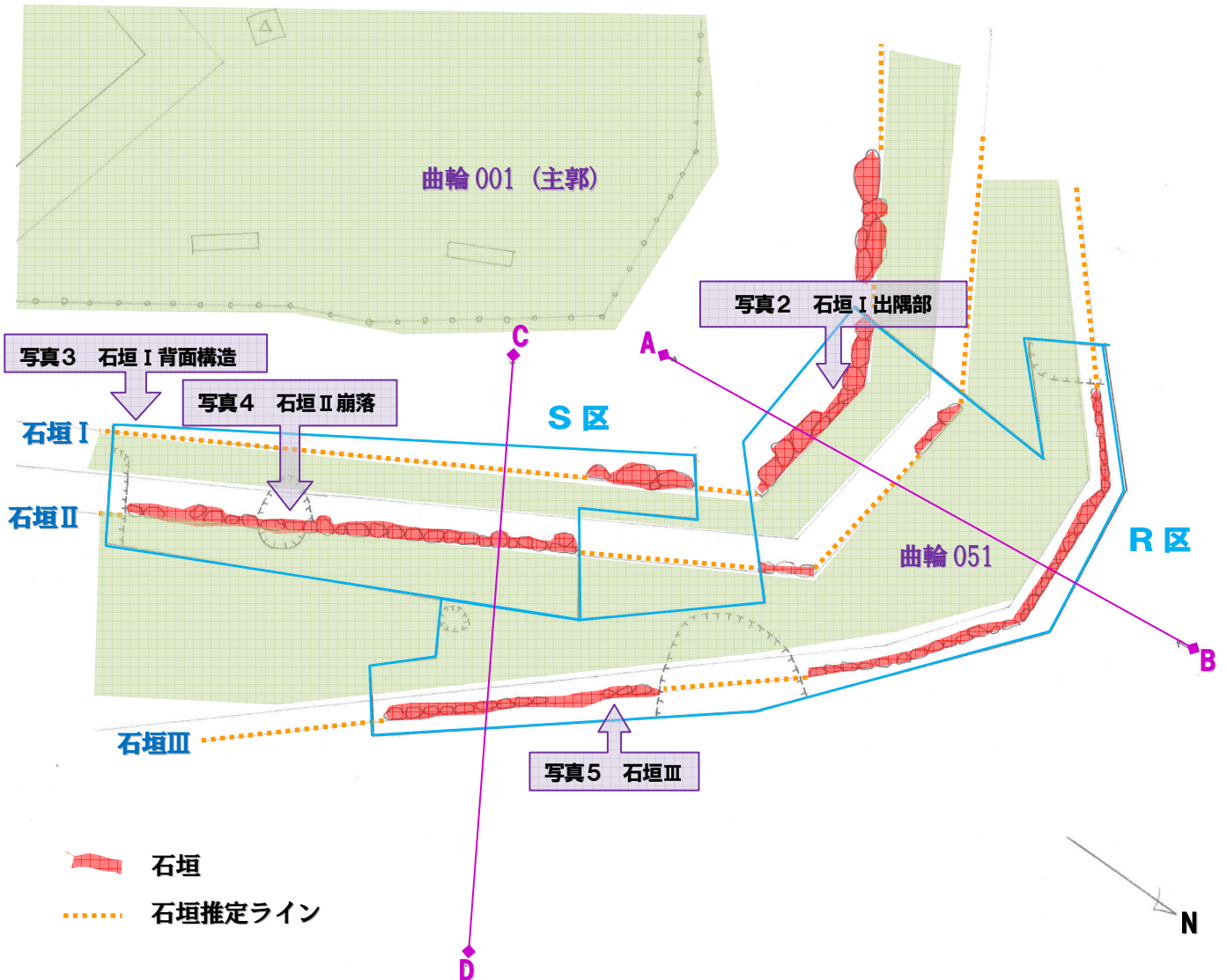


図2 R区・S区 遺構平面略測図

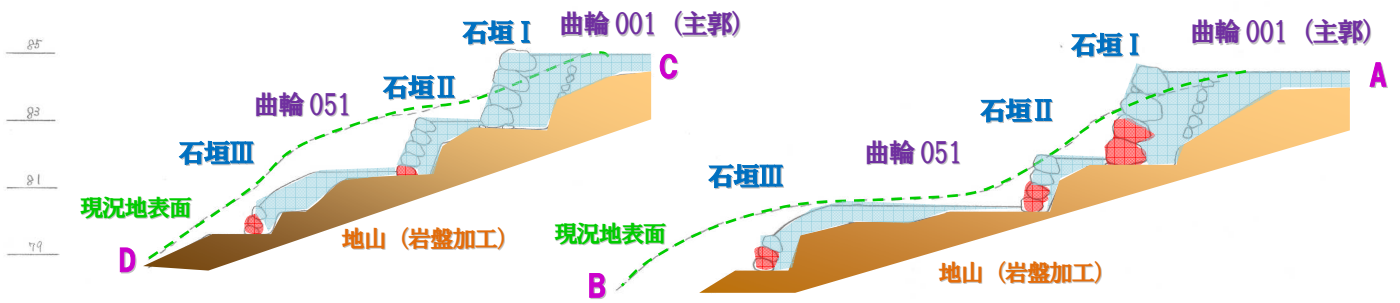


図3 R区・S区 石垣断面 想定模式図

2 主な成果

3段目の石垣を確認しました。「腰巻石垣」を初めて確認しました。

これまでの主郭地区の調査では段築状に築かれた2段の石垣（石壁）や北尾根の一部に3段の石垣を確認し、小牧山城の中心部は概して2重の石垣で囲まれると想定していた。（図1 赤色破線参照）

しかし、今回の調査で北～北東斜面に3段目の石垣が延びていることが判明し、主郭周囲を取り囲むプランとなる可能性が出てきた。過去の試掘調査において、主郭下段の曲輪で石垣を使用している状況を2箇所確認していることもその想定を補完する。

今回確認した石垣Ⅲの構築状況の観察から、石垣Ⅲは擁壁としての機能を重視した腰巻石垣で、主郭下段の帯曲輪（曲輪051）の平坦面をより幅広くする目的があったと考えられる。

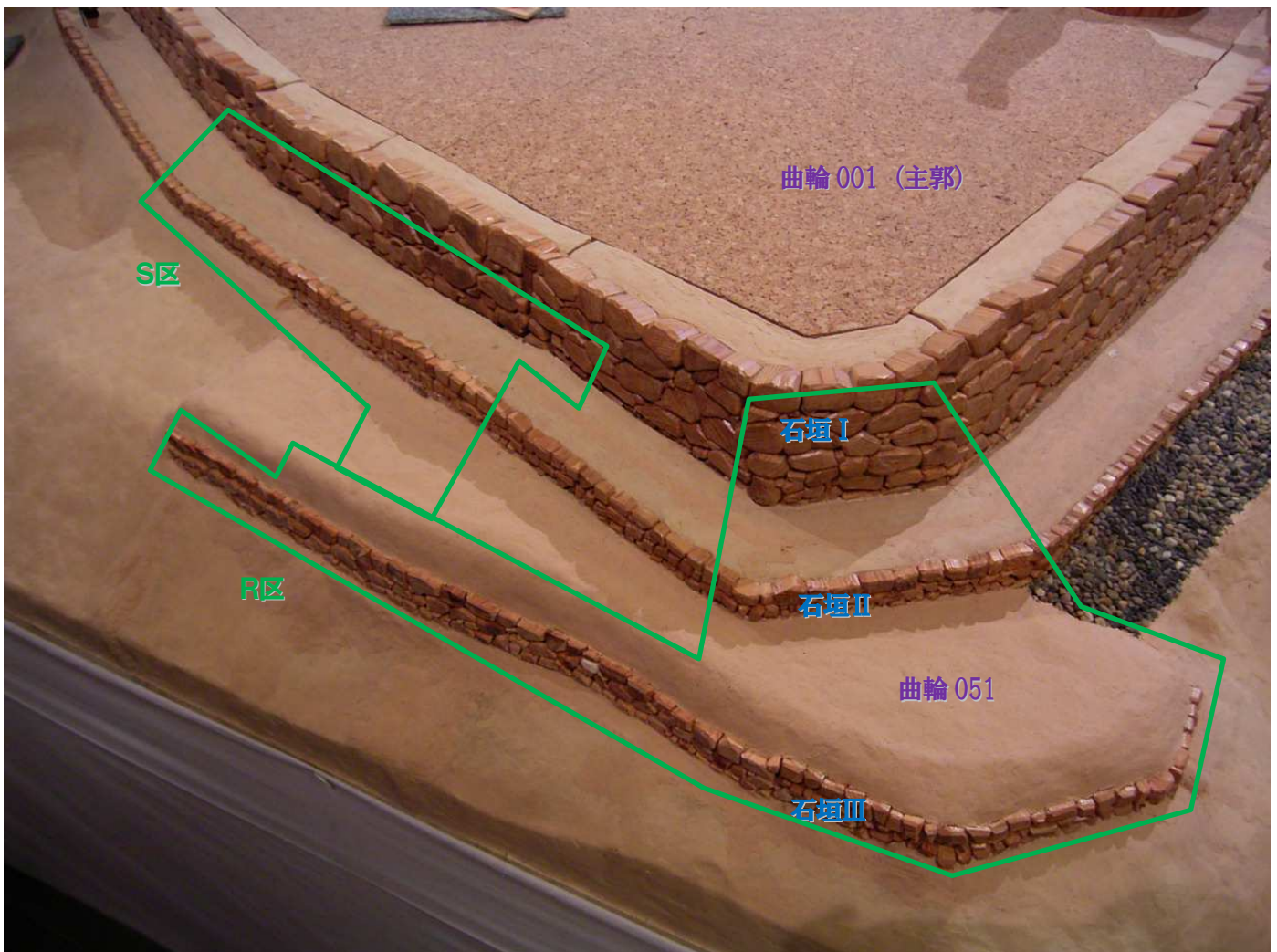


写真7 主郭北東斜面・石垣の想定プラン
(小牧市歴史館展示模型に加筆)